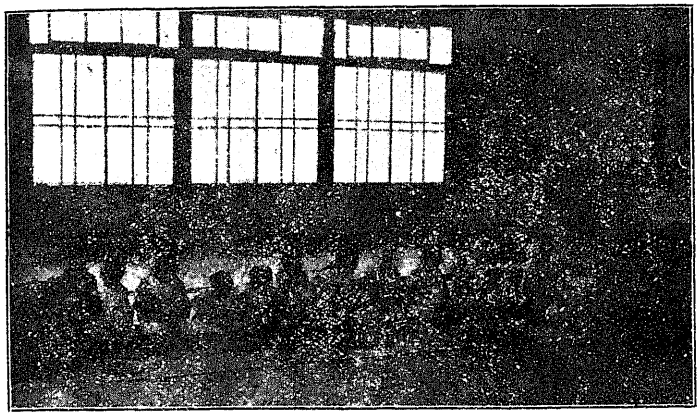
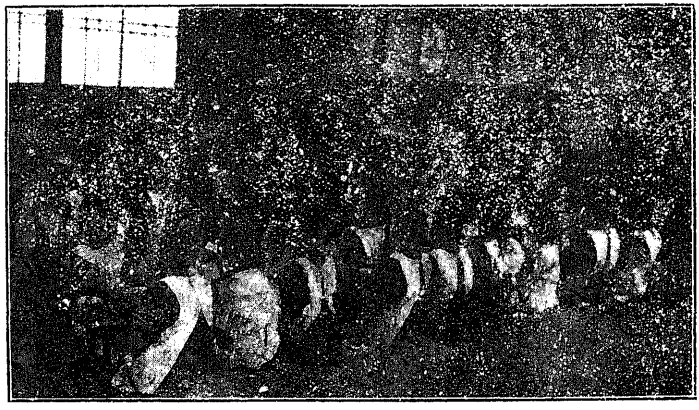
豆ちぎり

京都日彰幼稚園



手づから種を蒔いて出來た豆の皮をむく所



豆のおかづでお辨當を食べる所

例年の通り平野へ豆の種蒔をしたのは去年十月二十八日であつた。そら豆と豌豆をまいた、皆それ〴〵自分の名札を立てゝ置いたのだつた、それから三月目の十一月末に行つて見た、勢のいゝ豆の芽は出てゐたので幼兒は皆自分の名札をさがしあてゝよろこびの聲をあげてゐた、其成長を時々見にいつて實るのを待つてゐたのが月滿ちて美しい實は結ばれた、去年に比して出來ばえが良くなかつた、それは丁度實る頃に雨風の

強く吹いたのでたほされた、ためである、去年の半分しか收穫がなかつたけれども幼兒全體の一飯の御菜には不足ではなかつた、五月中にとりに行く筈であつたが天候の都合で行けなかつた。六月七日に出掛けた。土曜日であつたので朝の中にとつて來てお晝の御ちさうにしやうと云ふもくろみだからずい分忙がしい、九時に出門して平野についたのは十時であつた無論電車である。約一時間ですつかりちぎつてしまつた、それを持つて歸つて皮むきを皆でした(寫眞一部)むけた順に三鍋でたいてしまつた。廣い遊戯室は食堂にあてられた。年長組のものにおはこびや配列などを手傳はしめて用意が出來上つた。ご飯だけの御辨當をもつてそれ〴〵席が定まり、頂きますの挨拶あつて箸をとつた、「うちの豆よりおいしいなあ」なんて云ひ合つて食べてゐるのも心うれしい、(寫眞は其の一部)

約一人に五勺あてに盛り分けたのに、例の中京式の小食であるので大抵の兒は殘した、中には、二はいも平げたものも數人あつた、そら豆も豌豆も一しよにしたのである、割合に皮がやはらであつたので皮共に食せしめた。

○言ひわけをしない生活

子供が綺麗な花を手にもつてゐるのを見て、何氣なく、「まあ、綺麗なお花れ」といふと、「これ、摘つたのではないの、落ちてゐたので拾つたの」かうした言葉をあの可愛らしい口からきいたとき、ゾッとするほどいやな心持ちになつてしまふ。「え、綺麗でせう、」と何故いつてくれないのだろう。しかしこれは大人の世界の反映にすぎない。私達は言ひわけをよくする。他人がどう見るだらうか、どう考へるだらうかといふことを兎角氣にしすぎる、自分が信ずるところをありのまゝにしてゐれば、それがどんなに見えても思はれても、それは見る人々の心々で如何ともすることは出來ない。十人ゐればそこに十色の見方がある。八方美人にはなれる筈がない。ことに幼稚園の生活では、他の教育の場所のように、一定の教科もない、課程の進度表もない。一日の生活は實に先生自身の心持にある。その人生に對する考へ方にある。かうした深い生活を、たゞ一寸外部から見ただけで批評も出來る筈がない、わかる筈がない。先生自身は、だまつて、ちつと自分の信念のまゝに、子供と生活して行く以上にどうにもならない。言ひわけばかりしてゐては自分も子供も本當に生きて行かれない。誰かゞ「だまりこくつて死んで行く。」といつたが、本當にだまりこくつて生きて行けるようでなければ、生活に深みはないと思ふ。「何故さうしたか」といふ問を不用意に子供にあびせることは氣をつけたいものだ。まして、きゝもしないのに子供の方から言譯けして來られると返事もしたくない。なさけない氣がしてしまふ。私達は、だまりこくつて自ら眞實とおもふところに安心して生き、安心して子供の相手となつて行きたい。(T.K)